

第2回フォーラムのお知らせ

【私の意見 7】不本意からの脱却---みんなが納得する
生き方を求めて--- 廣末 良子

新規賛同者のお知らせ

連絡先等のお知らせ

元教職員はじめ、現教職員からも共感の声が多数寄せられる！

この間、「考える会」のニュースや第1回フォーラム報告集を読まれた元教職員や現教職員から、「賛同者になりたい」「カンパをする」「名前を出せないが思いは同じなので頑張りたい」「みんな立命のことを心配し、まともな立命であって欲しいと願っているのだ、と感動しました。」等々の励ましの声が多数寄せられています。

そこで、世話人会では、現在元教職員に限っている賛同者の幅を広げ、立命館に関わりの深かった方々を積極的に会の一員に迎える仕方について、検討を始めています。また、現役の教職員についても、「考える会」に協力したいという方々には、「賛同者」に類する位置づけで参加していただけないか、検討を始めています。この件について何かご意見がございましたら、ぜひ事務局までお寄せください。

さらに、ニュースの記事内容についても、参加している方々の交流の場にもなるように、「私の意見」のみならず「私の近況」等々についても掲載してはどうかと考えています。記事内容についてご意見のある方も、事務局にご一報ください。

第 2 回 フォーラム 開催 決定 !!

下記日程にて組合との共催で、第2回フォーラムを開催いたします。

皆様のご参加をお待ちしております。

問題提起のレジュメ、討議のまとめは、後日のニュースまたは報告集でお知らせします。

フォーラム

【テーマ】

立命館の「これまで」と「これから」～教育研究と組織運営～

【会場】衣笠キャンパス 至徳館（旧中川会館）——401 会議室

【開催日時】2008年4月12日（土） 午後2:00～4:30

※フォーラム終了後、懇親会を開催します。

懇親会：午後5:00～ 会場：カルム

【コーディネーター】佐々木 嬉代三氏（元副総長）

【問題提起】

- 井上 純一氏（元学生担当常務理事）
- 友藤 信明氏（元職員、2007年3月退職）
- 斎藤 敏康氏（立命館大学教職員組合副委員長）

共催 「立命館の民主主義を考える会（元教職員）」／立命館大学教職員組合

【私の意見 7】

不本意からの脱却——みんなが納得する生き方を求めて——

廣末 良子（元職員）

大切な宝物

2年前の2006年3月、大学コンソーシアム京都を会場にして、京都産業大学が「現代教育支援プログラム（GP）」を獲得した報告会とレセプションが開催された。学長、副学長をはじめ京都産業大学の役職者がずらりと勢揃いする中、学長は「このプログラムを通して私たちは大変貴重な宝物を獲得しました。それは学生のために教員と職員が心をひとつにして共に働く『教職協働』という宝物です。今後ともこの大切な宝物『教職協働』を生かしていきたい。」という言葉で挨拶を結んだ。

このとき、私は「『教職協働』が京都産業大学の宝物になったのか！」と、何とも複雑な思いに駆られたものである。もちろん大学コンソーシアム京都の精神からいって、これが広く普及することは喜ばしいことだ。ただ、みんなで作ってきた「教職協働」は、他大学の追随を許さない立命館の誇りであり伝統であったはずなのに、その立命館で「教職協働」の要をなす信頼が大きく揺らぎ始めている。そこに立命人として、なんとも歯がゆい思いを改めて抱いたということなのである。

私たちの求めてきた「立命館の民主主義」

私は、「立命館の民主主義」はシステムとして「全学協議会（全学協）」「業務協議会（業協）」等を創り上げ、具体的な業務を「教職協働」で成し遂げるものと受け止めている。だから「教職協働」の根底には、何よりも先ず学生のためという想い、学び成長する学生に寄り添い、学生とともに生き方を語り未来を語る、そこに教育の原点があるという想いがあり、そのためにこそ現場に根ざした日常業務をきちんとこなし、改革のための諸活動等、地道で意識的な取り組みを通して、相互の信頼を高めることが重要なのだと認識している。信頼関係に裏付けされた「教職協働」は、それぞれの持ち場で諸課題を成し遂げることによって、より大きな達成感とより大きな喜びを分かち合えることができると思っている。

「全学協」と「業協」に代表されるように、学園における重要な事項は、学生のために何ができるかを基本に全構成員が真摯に向き合い、論議しコンセンサスを得ていく。財政的に苦しい状況であっても、知恵を出し合いながら教職ともに仕事をやりあげ前進する。それが私たちの誇りでもあり、生き生きと働く原動力であったはずなのだ。

立命館学園はどこに行くの

2000年12月に31年間の在職を経て依願退職をした私は、「大学コンソーシアム京都」で勤務した1年6ヶ月を含め、いつも立命館大学の歩みに思いを馳せるとともに、困惑する7年間でもあった。それは退職後の私に、在職中の職員の人々から聞いてほしいと、数々の思い・悩み・不安が寄せられたからである。いずれも学園の行く末を危惧し、怒り、憂う内容であった。もちろん退職した私に話したからといって何かの影響力があるわけではない。しかし、だからこそ本音を打ち明け、聞いてほしいとの切なる思いと受け止めた。

一番の危惧としてあげられるのは「トップダウン」が横行し、学園の方向性が見えないことである。たとえば、常任理事会に諮ることなく一般理事会で決定されとか、会議は報告のみに終始し、意見・質問をだしても回答が返ってこない。また、マスコミで取り上げられて初めて教職員がその事柄を知る。現場の状況を見せず問答無用で課題が下りてくる。いつ決まったとも判らない行事が急遽スケジュールの中に組み込まれ、善後策に振り回されて本来の業務が後回しになる等があげられる。その現場の長を前にトップ層自ら「（50歳代は充てにしないこ

とを言外に匂わせ) 40歳代以下の支えに期待するしかない」と公言し、「役に立たないなら外から連れて来るしかない」と述べて、中高年の意欲を削ぐ。

また、労働に関しては大学改革で毎年部課が新設され、再編成が繰り返され、有期限で多様な雇用形態の増加で業務を熟知する人がいない。ミスがいつ起こってもおかしくない状況で神経を擦り減らして仕事をしている。ほっとする場、みんなと話し合う時間もなく、追い立てられているようでコミュニケーションがとれない。当面の実務に追われ、かつての様に教育を語り、学生実態に触れるなど教育に携わる基本的姿勢を形成する機会がもてない状況で、本当にきちっとした視点で仕事が継承されていくのか。また、パソコンに向かって黙々と働いていて、席が隣りでもメールで伝達する奇妙な実態。学部事務室をはじめとする教育・研究の現場を理解せず、企画部門のみに関わろうとする傾向が著しい問題等、具体的な事例の枚挙にいとまが無い。

「立命館の民主主義」を踏みにじる構図

そうこうする内に、2005年以來の一時金カット、総長選任規定の形骸化（理事長に権限が集中し、好きに候補者を選べる構造）等、事態はどんどんと悪化し、「殿ご乱心」「裸の王様」と囁かれても前理事長の耳に届くすべもない。この間の前理事長の発言や文書の中で、枕言葉のように使われる「学生のために、学園のために」の言葉が空々しく感じるのは私一人だけではないだろう。

そして、とうとう2007年3月、私にとって許しがたい事態が発生した。それは職員幹部の配転であった。彼は各会議において教学内容を見定め、現場に立脚し、言うべきことは言う、まさに「立命館の民主主義」を継承した人望厚い人物である。その彼が急遽配転となった。表向きの理由は何とでも繕える。だが、誰が見ても「自分の意に沿わない者は権力をもって排斥する」というもので、民主主義とは全く相容れない性格のものである。私の在職中、部課長会議の席で前理事長自ら幾度となく「たとえ僕と意見が違っても自分の意見を出し論議することが大切だ。」と言ったのは、あれは嘘だったのですか、と自問せざるを得なかった。これを機に、私の心中にあった「幻想を持ってはいけないと思いながらも僅かに残していた信頼」が、きれいに消え失せた。この配転以降、人事権を握られている職員の中に物言えぬ閉塞感と、諦めにも似た焦燥感が広がっていることは間違いない。

民主主義を踏みにじる極めつけは退任慰労金問題である。それまでは「私学危機の折」、一時金カットも止むを得ないと思っていた人までが、馬鹿馬鹿しい程分かりやすい図式に納得したようである。その次に勲章（「考える会」ニュース No.4 私の意見 6/宮澤氏の投稿をご参照下さい）とくれば、さらに分かりやすい。社会的名声と権力を得ると自己顕示欲からか、「金」と「勲章」を欲しがると——絵で描いたような図式ではないか。

納得の行く生き方をもとめて

2000年12月、APU開学式のメインステージの地球儀の上に日の丸が吊り下げられた年に、私は職を辞した。辞めるに際して自分で決めたことなので後悔はない。しかし挫折感とともに今はある種の不本意さをもっている。

40年前、倉敷から親・兄弟の反対を押し切って立命館大学に入学した私は、自分に納得できる行き方を求めての出発だった。1回生の授業で細野武雄先生の社会学の授業を聴いたとき、私の体に電光が走った。「ああ、私の知りたかったことはここにある！ 家族の反対を押し切ってでもここに来た甲斐があった！」と嬉しさと興奮のあまりその夜は眠れなかった。それ以来自分に納得のゆく生き方を求め、また課して生きてきた。

ある意味において、私の人格を形成した立命館は自分の一部であり、愛してやまない存在である。その立命館学園が形骸化していくことが見るに耐えない思いをしている自分がある。「今、

ある種の不本意さ」を突き詰めていくと、納得していない自分に突き当たった。退職した私に何が出来るかを問い返してきた。幸いにして同じ思いをする退職者の皆さんが「自由にもの言える立命館を！」をスローガンに集った。

そして、納得のいく生き方を求めて今ここにいる。

私的な思いと経緯を縷々述べてきたが、私と同様に多くの立命館学園をこよなく愛する人たちが立命館学園の行く末を案じていること。そして、みんなが納得する生き方を求め、勇気を出し、力を合わせ、知恵を寄せ合えば希望があることを、日々奮闘する現職のみなさんと共有したいと願っていることを知っていて欲しい。

呼びかけ人(50音順)

[2008年2月28日現在]

芦田 文夫、荒川 重勝、安藤 哲生、井上 純一、岩井 忠熊、小野 一郎、加藤 直樹、小檜山 政克
佐々木 嬉代三、佐藤 嘉一、杉野 圀明、辻村 寛、友藤 信明、廣末 良子、宮澤 正男

賛同者(50音順)

[2008年2月28日現在]

朝日 稔、芦田 文夫、荒川 重勝、安藤 哲生、石田 昌幸、石飛 幸子、伊藤 堅二、伊藤 武夫
井上 純一、岩井 忠熊、梅田 四郎、岡尾 恵市、奥地 正、奥村 功、小野 一郎、恩田 良昭
笥 文生、香積 学、加藤 直樹、川上 勉、菊井 禮次、栗山 崇、桑原 博昭、小檜山 政克
小村 英一、坂野 光俊、阪本 欣三郎、佐々木 嬉代三、佐藤 嘉一、杉野 圀明、須田 稔、園田 充則
高内 俊一、高木 彰、高橋 悠、田坂 和美、田中 宏道、辻村 寛、津田 孝司、堤 矩之
戸木田 嘉久、友藤 信明、中村 泰行、中山 康之、永原 誠、夏原 嘉弘、浪江 巖、廣末 良子
藤原 荘介、二場 邦彦、松田 全功、南 直樹、宮澤 正男、三好 正巳、森野 勝好、山口 幸二
山下 弘、山本 岩夫、両角 正子、若井 勉、和田 武

賛同者合計数：67名（匿名者6名含む）

「立命館の民主主義を考える会（元教職員）」（以後「考える会」と略す。）は、結成から2ヶ月を経過しました。この間、多くの方から励ましや激励のことばを頂き、またカンパも寄せられました。本当にありがとうございました。

いただいたカンパをもとにフォーラムの『報告集』を作成し、データの一括管理体制を整えました。それと共に、「考える会」の代表メールアドレスの開設をしました。

「考える会」は、今後とも「元教職員」らしく、ゆっくりしたペースで、地道に進めていくつもりです。今後の連絡先は以下のところに統一しますので、よろしく願いいたします。

事務局連絡先：

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 立命館大学教職員組合 気付

「立命館の民主主義を考える会（元教職員）」

TEL:075-465-8200（宮澤気付）

メールアドレス rits.democracy@gmail.com